

(114 頁への補足資料 「しるしの書」 ヨハネ 1:19-12:50)

1 新たな創造の最初の週 (1:19-2:12)

洗礼者ヨハネがファリサイ派の人々の前で証しする (1:19-28)

「ユダヤ人」は、ヨハネではイエスを拒絶するユダヤ民族出自の人々を指します。国家宗教の擁護者たちは、洗礼者ヨハネが、洗礼を授けるのは、何の権威によってであるかを知りたがっていたのです。

彼が、四福音書において自ら主張するただ一つの役割とは、荒れ野で叫ぶ預言者イザヤの声です。

洗礼者が弟子たちの前で証しする (1:29-34)

翌日 (二日目)、洗礼者ヨハネは、世の罪を取り除く神の小羊を指し示します。かつて、過越の小羊の血が、イスラエル人を破滅に導く天使から解放したように、イエスの死 (まさにその時、過越の小羊が神殿で屠られていました) によって世を罪から救ったキリスト教の過越祭〔復活祭〕の小羊なのです。

とにかく、福音記者はイエスによって与えられた唯一の霊とキリスト者の洗礼との関係を強調しています。

さらに、イエスこそ永遠に存在する方、人類の罪のために過越の小羊、苦しむ僕としての死に、それから新しいイスラエルの上に聖霊を注ぐ方なのです。

最初の弟子たち (1:35-51)

最初の弟子たちは、洗礼者ヨハネの弟子であり、イエスがガリラヤへ戻る前に、ヨルダン川で呼ばれたのです。ある特定の日 (三日目) に、二人の弟子たち、すなわちアンドレと誰か無名の人物が、イエスの後に従い、彼を「先生」と認知しています。その翌日 (四日目) に、シモンはメシアであるイエスのもとへ連れていかれます。

その翌日 (五日目) に、フィリポとナタナエルは彼の所に来て、彼をモーゼのような預言者、神の子であり、イスラエルの王であると認めます (49 節)。

とにかく、各エピソードの中で、イエスについての総体的な真実を示すことがヨハネの一つの傾向です。

また、ヨハネでは、本当に意味で「見る」ことは「信じる」ことを意味します (6:40 参照)。